迷える主とチキンな俺と

けんとマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
迷える主とチキンな俺と

【Ｎコード】
Ｎ７９５８Ｖ

【作者名】
けんとマン

【あらすじ】
超お嬢様こと涼月奏に口唇を奪われてから一週間。
学園祭がやってきた。生徒たちが興奮で沸き立つ中、俺も今年の学園祭は良い思い出を作ろうと学園祭に思いを馳せる。
そんな中、成り行きで俺は涼月と一緒に学園祭を回ることに・・・・・・！　ちょ・・・待ってくれ、俺は良い思い出が作りたいんだが・・・・・！？
俺の物語はここからはじまった。
お嬢様とチキンのラブコメディー！！

お嬢様とチキン　上（前書き）

この小説は原作三巻第一話後半からはじまります

お嬢様とチキン　上

ヤバイ。
どうしてこうなった？
目の前にはスバル様。
整った輪郭に小さな口唇。
ほんのりと赤い、きれいな桜色ーーーーーーー。
「・・・んぅ」
ーーー彼女は。
何かを堪えきれなくなったのか。
頬を染めたままで、ゆっくりと、俺の身体によりかかるように体重を預けてきてーーーー。

「あなたたち、こんなところで何してるの？」

保健室に響き渡る凛とした声。
思わず声のした方に視線を向けると、ドアを開けて保健室に入ってきたのは艶やかな黒髪をツーサイドアップにした美少女の姿。
涼月奏。
彼女は向かい合う俺たちをどこか冷めた視線で観察していた。
「お、お嬢様！？　ち、違うんですっ！　これは、ジローが強引に・・っ！」
凄まじい勢いで俺の身体から離れる執事くん。
おい。強引にって、いきなりキスするとか言い出したのはそっちなんじゃ・・・・・。
「ふぅん、そうなんだ」
涼月はちらりと俺を一瞥すると、ほんの一瞬だけ微妙な顔をしてから、こっちへ近づいてきた。
こいつ、今顔をしかめなかったか？　そんなことめったにないのに、

涼月にしては珍しいこともあるもんだ。
「まぁ、何をしようと構わないけど、気を付けてね。学園じゃあなたは男の子ってことになってるんだから、私以外に見られたら誤解されちゃうわ」
「うっ・・・申し訳ありません・・・」
近衛は飼い主に叱られた犬のようにしゅんとうなだれた。
そのまま俺をジト目でギロリと睨み。
（全部お前が悪いんだからなっ！）
小声で呟いてから、ギラギラとプレッシャーをかけてくる。
いや、だから俺が何したっていうんだよ。
「おはよう、ジローくん。なんだかこうやって話すのは久しぶりね」
ベッドの横に来た途端に優しい表情で微笑む涼月。
ふざけんな。おまえとの会話に、俺が大人しく応じると思ったか。
「じゃあな近衛。俺は先に教室に戻ってるよ」
いいながら、ベッドを飛び降りて出口へと向かう。
このお嬢様のことだ。どうせ塞がりかけた俺の心の傷を強引に切開するに決まってる。なのでここはディスコミュニケーション。逃げるが勝ちである。
「ーーーーダーメ。逃がさないわ」
ガシッと。
いきなり涼月の細い腕が俺の腕に回されーーーいや、身体ごと抱きついてきた。
「・・・・っ！？　てめえっ！」
何しやがるこの女！？　さては俺の逃走を予測してやがったな。
「は、離せ」
俺がそういうと、涼月は妙に甘い声で。
「ねぇジローくん。　お話、しましょう？」
むにゅ。
っと俺の胸に凶悪で恐ろしい二つの殺人兵器が押し当てられる。
ぎにゃあああああ死ぬ！それに鼻血がっ！？

「それで？　してくれるの？」
むにゅ。
「ぐうっ！？」
むにゅむにゅ。
「ねぇ。・・・・・・ジロぅ」
「ぎゃあああああっ！　降参します！　お話しますからその殺人兵器をあてないでっ！」
ようやく俺の身体から離れたお嬢様を睨みながら鼻を抑える。
くそっ！　こいつといるとやっぱろくなことにならねえ。
「で？　お話とは何なんですか、　涼月さん」
「え？　あ、話？　それは学園祭のときの私たちのクラスのだしものについて、報告があるの」
「報告？」
こいつ、今絶対忘れてたな。
「ええ、実は――うちの学園祭のときのだしものが急遽変更されたの」
「・・・・・は？」
・・・・・・。
ちょっと待て。
この女、いきなりなに言ってんの？
「ＬＨＲで学園祭の話し合いをしてたのよ。そこでコスプレ喫茶についての反対意見が多く出ちゃってね」
「ちょ、ちょっと待て！　確かに前から反論はあったけど、ちゃんと多数決で決まったことだろ！　それの田村は！？　学園祭実行委員あいつが変更なんて許すはずが・・・・」
そう、我らが学園祭実行委員　田村。
あいつのおかげで、俺たちは多数決という非常に民主的な手段で女子を圧倒し、コスプレ喫茶の権利を勝ち取ったのだ。
「ああ、田村くんね」
涼月は至極冷静な口調で我らが変態の名を告げてから。

「ーーーー彼は死んだわ」
「田村あああああああああああっ！？」

お嬢様とチキン　上（後書き）

読んでくださりありがとうございました
これからもがんがん投稿していきます

お嬢様とチキン　下（前書き）

続編です。
感想もらえると嬉しいです。

お嬢様とチキン　下

超お嬢様こと涼月奏の口から告げられた一言で俺は軽いパニックに陥っていた。
「田村くんは死んだわ」
「田村あああああああああああっ！？」
「冗談よ。でも怪我をして病院に運び込まれたのは事実」
「なっ・・・・・まさか涼月！　お前の仕業か！？」
秘かに田村に刺客でも送ったのかもしれない。
なにせいきなりクラスメイトにキスをするような女だ。
それくらいはやりかねん。
「人聞きの悪いこと言うのね。田村くんは、今朝登校途中不運にも乗用車にはねられたとか。命に別状はないけど、しばらくは入院生活だそうよ」
「な、なんだそりゃ・・・・・」
ちくしょう、根性みせろよ田村。
「心配しないで。クラス委員長の私が学園祭実行委員の仕事も兼任することになったし、だしもの自体は、コスプレ喫茶からそこまで大きく変わったわけじゃないから」
「は？」
どういうことだ？　女子はあれだけ反対していたのに。
困惑で固まる俺に、涼月は口唇を吊り上げて、邪悪に微笑んだ。
「そう――――コスプレ女装喫茶。それが私たちのクラスのだしもの。今回は男子に一肌ぬいでもらうことになったの」
「へ？」
なになに？　コ・ス・プ・レ・女・装・喫・茶って、
「何だそりゃあああああああっ！？」
気付けば俺は叫んでいた。
・・・・・なんてこった。

女子のコスプレを観賞するどころか自分の女装を拝むことになるとは。
「あの・・・お嬢様」
不意に黙っていた近衛が口を開いた。
「と、ということは・・・ボクも、その・・・女装するんでしょうか？」
「！」
そうだ。女子の代わりに男子がコスプレするってことは、当然近衛も――普段は男装してるこいつも、女の格好をしるってことに。
「ええ、そうね。そもそもこんな企画になったのはそれが原因なのよ。
みんな、よっぽどあなたの女装姿が見たいみたい」
俺の頭に歓声をあげるクラスメイトの顔が過る。
分かる。分かるぞお前らっ！　確かに近衛のコスプレは見たい。
「私だってこんなややこしい展開になるとは思ってなかったの。でも、別にいいわよね、スバル？」
「えっ？」
いきなり話を振られた近衛はちょっと間をおいてから満更でもないといった感じで。
「はい」
デビル涼月め。本当に振り回してくれる。
・・・学園祭、か。
これは、とても楽しんでるヒマはなさそうだ。
「さて、そろそろ二時限目ね。ジローくんは先に教室に戻っていて」
「？　別に構わないけど、なんだよ。おまえら授業サボるのか？」
「サボるわけじゃないわ。じつは今朝、下駄箱にこんなものが入ってたの」
と言って、涼月はピンク色の封筒を俺に見せた。
なんだこれ？
「実はこれラブレターなの」

「ラブ・・・って今時！？」
「そう、これで休み時間にひと気のない教室に呼び出されちゃった。」
確かに涼月は学園男子憧れの的だし、それこそ一年の時からかなりの数の告白を受け、容赦無く断ってきたって噂はあるが・・・。
「ねぇ、ジローくんはどう思う？」
唐突に。
涼月は上目遣いで俺に訊ねてきた。
「どう思うって・・・何が？」
「このラブレターのことよ。やっぱり私、待ち合わせ場所に行った方がいいのかしら？」
「？　まぁそりゃな。だって、おまえもそのつもりじゃないのか」
「・・・・・・」
涼月は表情を少し険しくして「ふぅん」と息をはいた。
「じゃあ――もし私が了承したら」
「は？」
「だから、もし私がこのラブレターの相手と会って、その告白を了承したら、あなたはどう思う？」
「・・・・・・？」
うーん、いきなりそんなこと言われましても。コメントし辛いな。
「・・・・別に。付き合っちまえばいいんじゃねーか」
さすがに本音をいうわけにもいかないので、テキトーなことを言った。
すると、涼月はさっきよりもあきらか表情を険しくして黙った。
「？　どうした涼――――」
月、と言おうとしたところでいきなり涼月にベッドに押し倒された。
「なっ！？　おまっ！　何してんだよ！」
俺は涼月に覆いかぶさられながらも必死になって抵抗する。
だが、例の発作により思うように力を出せない。
ヤベっ！　鼻血がっ！？

「何って・・・・・ジローくんが悪いんだから」
そう言って涼月は俺の耳に甘い息を吹きかけた。
「ひょおおおおおおおうっ！？」
俺の背中にぞくぞく、と悪寒が走り身体中に鳥肌がたつ。近衛に助けを求めようと思ったがやめた。近衛は完全に放心している。
「本当に・・・・いいの？」
涼月のこの一言により俺の脳は完全にパニック状態。
「いいのって・・・・何がだよ！？」
「だからぁ、私が本当に告白を了承してもいいのってことよ」
「だからそれならさっき言っただろ！？　別にひぎっ！？」
むにゅ。
再び二つの殺人兵器が押し当てられる。
涼月はさらに甘えた猫のような声で。
「ジローくん？　ど・う・な・の？」
「はいいいいいっ！　嫌です！　涼月様に彼氏ができるのはいやですーー！！」
「はい。よくできました♪」
言って、涼月は俺から離れた。
「じゃあねジローくん。行くわよスバル」
「え？　あ、はい」
放心していた近衛が慌てて主のもとへむかう。
やっと解放されるのか、と俺が肩の力を抜いたところで。
「あ、それとジローくん。今年の学園祭は一緒に回ってもらうから」
すんごい笑顔で言った。　言い放ちやがった。
「嘘だろおおおおおおおっ！？」
そんな俺の心からの叫びを無視してお嬢様は去っていった。
始まる前からこれかよ・・・・本当に、大丈夫なんだろうな？　学園祭。

お嬢様とチキン　下（後書き）

読んで頂きありがとうございます
またよろしくお願いします。

俺とお嬢様と学園祭　上（前書き）

今回は駄作率１００％です。
すみません。次また頑張ります

俺とお嬢様と学園祭　上

『これより第百二十二回浪嵐学園祭の開始を宣言します！　みなさん！　今日は思いっきり楽しみましょう！』
「「「わああああああああっ！！！！！」」」
と、いうわけで学園祭当日。
初夏の日差しが降り注ぐ中、俺は超お嬢様こと涼月奏を待っていた。
何でそんな事態になっているのかって？　いや、本当にどうしてこうなっちゃったんだろう？
成り行き上、涼月と学園祭を回ることになってるが肝心の俺はと言えば、はっきり言って乗り気じゃない。
それもそのはず、平静平凡な人生を送っていた俺をこんな波乱万丈のストーリーに巻き込んだのは、紛れも無く涼月奏なんだから。
「おまたせジローくん。待った？」
騒がしい場でもよくとおる凛とした声。
声のした方を振り向けば、待ち人。
涼月奏がいた。
「遅ーよ。」
涼月は何か気品のある雰囲気を纏いながらこっちに近づいてきた。
「そこは違うわよジローくん。ううん、今来たとこって言うのよ」
「知るかよ。遅れたのはそっちだろ」
俺の言葉に涼月は顔を曇らせた。
「父が・・・・・倒れたの」
「は？　た、大変じゃねえか！　こんなとこ来てる場合じゃないだろ！？」
「大丈夫よ」
「全然大丈夫じゃねえって！」
「だって、デタラメだもの」
「・・・・・・・・・・・・・」

くたばれこのサディストおおおおおおおおっ！！！
俺は心の中であらんかぎりに叫んだ。
「お前さ。ついていい嘘といい嘘があるだろ」
「ふふっ、ごめんなさい。本当はスバルがついてくるってうるさくってね」
「心配して損した」
俺の隣に来た涼月は突然、ガシッと俺の腕を抱きかかえた。
当然俺の腕に二つの凶悪な肉まんは当たるわけで。
「てめえっ！　いきなり何してんだっ！？」
「ジローくん。これは女性恐怖症の治療よ」
どう考えても荒療治だっ！！
「あと、この学園祭の間は私たちは恋人」
「・・・・・・何？」
「はい、名前で呼んでみて」
俺は気恥ずかしさで、うっと言葉を詰まらせた。
俺は今まで灰色の人生を送ってきたため、女の子をファーストネームで呼ぶなんて経験がない。
しかも相手は普段からつるんでいる女の子である。恥ずかしくないわけがない。
俺がしばらく黙っているとそれに見兼ねたのか涼月は。
「何？　女の子を名前で呼ぶこともできないの？　やっぱりチキン野郎ね」
「何だよ！？　そこまでいうなら言ってやる」
「じゃあ言ってみて」
「・・・・・・・・奏」
瞬間、信じがたいことだがあの涼月が頬を染めた。
ドキューン。
俺のハートが欠片も残さず打ち抜かれた。
だって、あの涼月奏だぞ！？　仕方がないじゃん。デレ月さんマジパネエッす！！

「ささささ、さあ行きましょうか」
「そそそ、そうだな。行こうぜ！！」
そうだ忘れよう！　遊んでこんな黒歴史は忘れるんじゃあああああ。

それではここらで筆を置かせていただきます

俺とお嬢様と学園祭　中（前書き）

駄作です　すいません

俺とお嬢様と学園祭　中

「はいジローくん。あーん」
眼前に差し出された鯛焼き。上目遣いで見つめてくる超お嬢様こと涼月奏。
「はい、あーん」
「うっ・・・・・・」
「・・・・食べて、くれないの？」
おかしい、何かが致命的におかしい気がするが・・・・デレ月さん万歳！
「あ、あーん」
パクリ。
モグモグ。
「@¥&@%#＝＋！！！！！！！！！！！！！！」
「落ち着いてジローくん。ここは地球よ」
かあああああれえええええええ！！！！！！！！！！　辛いよっ！？　こんなものを学園祭で売っていいのかよ！？
「おかしいわね。これにはちゃんと『鮮血鯛焼き』って書いてあるのに」
「間違い無くそれが原因だろうがあああああああっ！！！！！」
「からし１００％（笑）」
「（笑）じゃねえええええええっ！！！！！　くそっ！　お前にもくわしてやる！！」
俺は涼月の手から鮮血鯛焼きを奪い取り、無理矢理口を開けさせる。
「きゃっ」
「あ、悪い」
うーん少し強引だったな。涼月も女の子なんだしもっと優しく。
「強引なんだから（笑）」
前言撤回。この女いつかぶっ殺す。

「はぁ、馬鹿やってないでもう行くぞ」
俺は地面を笑い転がっている馬鹿を立たせるため手を差し伸べる。
その手を見て涼月（馬鹿）は。
「んもう。エッチ♪」
「本当っ！！　てめえの思考回路はどうなってんのかねえええっ！！！！！」
「ほらジローくん（笑）　叫んでないで行くわよ。」
「てめえのせいだろうがっ！！！！　あと、人の名前に笑をつけんじゃねえ！！」
はあああああああああ、と俺は特大溜息をついて。
「お前といるとマジで退屈しねえよ。悪い意味で」
「あら、奇遇ね。私もあなたといると退屈しないわ。だって面白いことがいっぱい起きるんだもの」
「起きるんじゃなくて、お前が起こしてるんだよ！！」
「だって――――――――」

♂×♀

「ぷっ、あはははは！　ぷぷっ」
「わ、笑うんじゃねえええ！！！！」
叫ぶ俺（女装ｖｅｒ）　と笑すぎて泣いている涼月。
仕方がないじゃん。クラスの出し物なんだからさっ！
「だって、コスプレ、ぷぷっコスプレ女装喫茶『どうしてこうなった』最高！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
あーそうかい。俺は最悪の気分だよ。
俺は渋々と教室に戻る。
そこには親友　黒瀬がナース服でいた。
「どうしようジロー！！　俺、なんか気持ち良くなってきちゃった

！！」
「や、やめろ！　黒瀬！　そっちにいっちゃだめだ！！　黒瀬ええええええええ！！！！」
「らめえええええええええええ」

♂×♀

「次はどこ行きたい？」
「・・・・・・ああ」
「ジローくん？」
「・・・・・・・・・・ああ」
俺は涼月の言葉責めにより放心状態。
もう煮るなり焼くなりどうにでもしてくれ。
涼月はそんな俺の隣で溜息をついた。
「そろそろ。いってもよさそうね」
「・・・・・・・・・何？」
「実はね、私があなたに恋人の振りをさせたのは今日秘密裏に行われるイベントのせいなの」
「・・・・・・・・・・・いべんと？」

俺とお嬢様と学園祭　中（後書き）

今後ともよろしくお願いします

俺とお嬢様と学園祭　下（前書き）

遅くなってすいません。
楽しんでもらえたら嬉しいです。

俺とお嬢様と学園祭　下

「・・・・・・・・・イベント？」
「ええ。今日の後夜祭の隠しイベント、Ｓ４ＶＳ見守る会　スバル様カルトクイズ」
「？　それがどう俺と関係あるんだよ」
「分かるでしょう？　もしＳ４が勝てばどうなるか」
「・・・・・・・・・・・・」
ええと。Ｓ４はスバル様が大好きで、スバル様と仲の良い俺を目の仇にしてるわけだから。
「！」
涼月は邪悪に微笑んだ。
「そう。その勝敗によってはあなたに危害が及ぶことになるわ」
たたたた、た、大変だ！！
「どど、どうすんだっ！？　俺、殺されちまうっ！！」
慌てる俺に涼月は、冷たい視線を向けた。
「そうでしょう？　困るでしょう？　そこで取り引きよ」
「な、何だよ」
このお嬢様のことだどうせろくでもないことに決まってる。
「学園祭が終わった後にある夏休みの間、私の使用人になりなさいっ！」
「・・・・・・は？」
はあああああああああああっ！？
「嫌？」
「いやに決まってんだろっ！」
「あーあ。せっかく助けてあげようと思ったのに・・・・・・」
「うぬぬぬぬぬっ！！」
くそっ！！　さすがはデビル涼月。　降参だ。白旗あげるんで助けてください。

「・・・・・分かったよ。この際背に腹は変えられねえ。やるよ、使用人」
涼月は心底楽しそうに満面の笑みを浮かべた。
「交渉、成立ね♪」

♂×♀

「で？　どうやって見守る会を勝たせるんだ？」
その秘密イベントとやらが行われる旧体育館に俺たちは向かっていた。
「ああ、簡単よ。クイズを出題するのは私なの。だから見守る会が解る問題を出題すればいいわ」
うわー。この女マジで悪魔。自分のためとはいえ何か罪悪感が・・・・・・。
「お、おおう・・・・・」
旧体育館に入った俺は改めて近衛の人気の凄さを思い知った。
人、人、人、旧体育館内のどこを見渡しても、見えるのは全身を覆う真っ白いローブと目玉用に穴が二つついた白い三角のフードを身に纏った会員のみ。
はたからみれば悪魔宗教か地下マフィアの会合である。
「全部で何人くらいいるんだ？」
「そんなの分からないわ。でも、百人は超えてるんじゃない？」
さすがはスバル様ファンクラブの二大勢力だ。
なんていうか。もう次元が違うな。
「さて、そろそろ始めるわよ」
「ん？　ああ」
涼月は自分もフードとローブを見に纏い、ゆっくりと壇上にあがった。

「皆さん、本日はよくお集まりくださいました。それでは――」
彼女は、よく通る――凛とした声で告げてから。

「第一回スバル様カルトクイズ大会を開始します」

「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！」」」
あまりの大音量により震える体育館。
ついに、Ｓ４と見守る会。
スバル様二大勢力が激突した。

俺とお嬢様と学園祭　下（後書き）

まだまだ続きます。
次回はいよいよカルトクイズ大会です。

スバル様カルトクイズ大会　上（前書き）

続編です

スバル様カルトクイズ大会　上

「それでは第一問ーーーーーーーーー」
涼月が息を吸い込みマイクに顔を近づける。
ーーー静寂。
旧体育館を静寂が包みこんだ。
「スバルがーーーー」
近衛が？
「ーーーーーーースバルが二週間前の火曜日に購買で購入したパンは何でしょう？」
「んなもん分かるかーーーーーーーっ！！！」
気付いたら全力でツッコミを入れていた。
いや、だっておかしいだろ！？　そんなの見守る会だってわかんないよ！？
「はいっ！　コッペパン　チョココロネ　メロンパン　タマゴサンドです」
「正解です」
解るやついたーーーーーーーーっ！？
「緊張してボタン押すの遅れちゃった～」　「いや～やっぱ最初の問題はレベルが低いね」
耳をすませばあちらこちらからそんな声が聞こえてくる。
しかもこれでレベル低いの！？　お前らそれファン通り越してストーカーだろっ！？
壇上の涼月が「それでは第二問です」というと、再び旧体育館には静寂が訪れた。
「昨日スバルが飲んでいたジュース」
よしっ！　これなら俺にも解るぞ！
俺は手を挙げようと右腕に力をーーーーーーーー。
「ーーーーを学園の自販機に補充している会社の社員のプロフィ

ールは？」
「二問目にしてスバル様関係ねえええええ！！！」
あまりの衝撃に絶叫する俺。
しかし今度はＳ４サイドから。
「はい！　カルロス上原！　家族を国に残して出稼ぎに来ている日系ブラジル人！！」
「正解です」
なんでだよっ！？　どうやったらカルロスさんの個人情報までゲットできるんだよ！？
逆にそこが気になるよ！？
驚愕する俺に対し、Ｓ４と見守る会の連中はどんな難問もことごとく答えて行く。
正解率は五分五分。
どちらが勝つかは分からない。
ああ、ちょっと落ち着かなくなってきた。
と、そこで涼月が。
「皆さん次が最終問題になります」
ちょっと待て。　今双方の正解数は４９と４９だから次正解した方の、勝ち？
「第九十九問ーーーーースバルのファーストキスの相手は誰でしょう？」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
・・・・・・・・・・・スバル様ってキスしたことあんの？

スバル様カルトクイズ大会　上（後書き）

よんで頂きありがとうございました

スバル様カルトクイズ大会　中（前書き）

遅れてすいません

スバル様カルトクイズ大会　中

「ーーースバルのファーストキスの相手は誰でしょう？」
壇上のお嬢様　涼月奏はそう言い放った。

瞬間、会場が凍りついた。
ファーストキス？
ポカンと。
会場にいる全員の人間がそんな感じで黙り込んだ。
俺はもちろん。Ｓ４や見守る会までもがことごとく沈黙している。
「「「「・・・・・・・・・・・・・・」」」」
完全なる静寂が会場を支配する。
そこで、壇上の涼月が口を開いた。
「誰かいませんか？　これでは引き分けになりますが」
沈黙。
それを見て涼月は俺だけに見えるようにウィンクした。
そうか。そういうことか。あのお嬢様は最初から引き分けにするつもりだったんだ。
なるほど。これなら暴動が起きることはないし、俺にも危害は及ばない。
それにしても・・・・・近衛のファーストキスの相手か。
ちょっと気になるな。
そんなことを考えていた俺の耳に聴こえてきた凛とした声。
会場中の視線が集まる。
「誰も回答者がいないので、第一回スバル様カルトクイズ大会はーードローとします」
よっしゃああ！！　これで安心してしばらくは生活できるぞ！！
俺がホッとしたまさにその時。
「余談ですが。スバルのファーストキスの相手はーーー」

壇上の涼月はゆっくりとその細い指で俺を指した。
「ーーーーそこにいる、坂町　近次郎くんです」
「「「「なあああああああにいいいいいいいいいっ！！！？？？」」」」
なにやってくれてんだあのお嬢様はあああああっ！？　余談する意味がどこにあったんだよ！？
「ちなみに場所は今年四月にリニューアルオープンしたレジャーランドです」
「「「「ぶっ殺す」」」」　　「「「「きゃあああああ！！　そそそ、その時メガネは！　メガネはしていたんですよね！？」」」」
しかも、追い討ちかけやがったあああああ！！
「といっても、事故のようなものです。そのとき坂町くんがプールで溺れてしまって、それを必死で助けたスバルは、慌てるあまりついつい人口呼吸をしちゃったらしいんです」
うそーん！？　あの時そんなことがあったの！？　俺まったく知らないんだけど！？
だが、時すでに遅し。
俺の周りを取り囲んだＳ４（鈍器持参）はすぐそこまで迫っていた。
壇上の涼月を睨むと、涼月は目を逸らしてべー、と舌を出した。
くそっ！　やっぱり確信犯か！？　後で絶対ぶっ殺してやる！！
呪ってやる！！
そこでＳ４の一人が目を血走らせながら俺に殴りかかってきた。
俺は危機一髪のところで避け、人ゴミに紛れながら壇上に上がる。
「逃げたぞ！　追え！　絶対に殺すぞ！」
「「「「了解！！」」」」
そこは了解しちゃだめだあああああ！！
「あら、ジローくん。どうしたの？　ずいぶん元気がいいのね」

俺が涼月の近くまでいくと、悪魔のお嬢様はそうぬかしやがった。
うわー、すっげえ楽しそうこの女！
苦境に立った俺を見て心底楽しんでやがる！
「おい！　どうにかしろ涼月！」
「どうにかしろって、何を？」
「決まってんだろ！　このままじゃ俺はあいつらにぶっ殺される！」
「あら大変」
この女、完全に他人事だとおもってやがる！
「おとなしくそこで待ってろよ！！殺してやるから」
ひい！？　すぐそこまで来ちゃってるよ！？　万事休すかっ！？
「ーーーーーー」
ーーーー瞬間。
俺の身体を電撃が駆け抜けた。限界まで追い詰められた俺の身体が何らかの脳内麻薬を分泌させたのかもしれん。
ーーー閃いた。
そうとしか言いようがない。
あまりにも突然だが、この状況を打破するかもしれない方法を思いついてしまった。
「・・・・・っ！」
でも、その方法にはちょっと勇気がいる。
何せ、俺にとっては初体験だし、命を守るやめとはいえ、できれば躊躇いたい。
それでもーーーーー。
「ーーーー涼月、マイクかしてくれ」
静かに、俺は涼月にそう伝えた。
「？」と不思議そうにしながらも、涼月は俺にマイクを手渡した。
よし、あとは度胸だ。
目の前には、今まさにステージへと飛び上がらんとするファンクラブメンバー達。
そいつらに、俺はあらんかぎりの大声で叫んだ。

「みんな聞いてくれ！！」
俺の声で、必死の気迫が伝わったのか、ラッキーなことに群衆の動きが遅くなった。
チャンス！
「一つだけ言わせてくれ！　今日のイベントはみんな俺と近衛が付き合ってるって思ったから起きたんだろ！　でも・・・・実際は違うんだ！　俺と近衛は付き合ってるわけじゃないんだ！」
弁解が届いたのか群衆の動きが完全に止まる。
全員がこっちを見ている。
「ああ。近衛とは付き合ってるわけじゃなくてただの友達なんだ。俺が・・・俺が本当に好きなのは・・・・・」
そう言って、一度大きく息を吸い込んだ。
そして。
しっかりと———起死回生の言葉を口にする。
「俺が・・・俺が本当に好きなのは————ここにいる涼月奏なんだぁーーーーーーっ！」

スバル様カルトクイズ大会　中（後書き）

どうでしたか？
次回はいよいよ学園祭編クライマックスです
お楽しみに

スバル様カルトクイズ大会　下（前書き）

学園祭編最終話です。
楽しんで貰えたら嬉しいです

スバル様カルトクイズ大会　下

「俺が・・・俺が本当に好きなのは――――ここにいる涼月奏なんだぁーーーーっ！」
あまりにも不意うちの告白に群衆は一瞬でざわめいた。
「え？　まさか、今のって・・・・・・・」
「も、もしかして・・・・・告白？」
「きゃあ！　うそ、こんなに大勢いるところで・・・・・！」
ざわざわ、きゃあきゃあと旧体育館に響き渡る困惑の呟き。
・・・・・よし。
ここまでは計算通りだ。
そう、告白である。
これこそが、俺の考えた起死回生の策だった。
ご存知の通り、涼月はモテる。
だから、今ここで俺がいきなり告白しても何ら不思議じゃない。
完璧にハッタリ――――涼月風に言えばデタラメである。
これで少なくとも俺と近衛が付き合ってるって考えを、連中の頭から払拭できたはずだ。
あとは近衛のファーストキスが俺だったなんて大問題もあるが、それもこれから消える。
そう――――俺はこれから涼月にフラれる。
最初から分かっていたことだ。だって、あの涼月奏が俺の事を好きなわけがない。
だったら、俺の告白なんか受けるはずないのである。
こんな大勢の前で学園のアイドルに告白し、フラれる。
その強烈すぎるインパクトで、すべてをチャラにする！
あとは、涼月が俺の告白を断ってくれれば・・・・・。
「・・・・・・」
涼月は。

珍しく頬を染めて驚いたように固まっていた。
しかし、すぐに何かを感づいたのか、今度はあからさまに不機嫌な顔をして俺からマイクをひったくった。

「ーーーありがとう。坂町くん」

そんな風に微笑んだ。
・・・・・・・。
ありゃ？
なんか予想してたリアクションと違うな。
まさか、ＯＫしちゃうなんてことはーーーーー。
「でも、ごめんなさい」
しかし。
涼月はすぐに自分の言葉を翻して。
「こんなところでこんな風に告白されても、私はあなたと付き合うことはできないわ」
「！」
い、今の発言。まさかこの女、俺の計画に気づいて・・・・・・！？
だが、今はそれでいい。
俺の計画通りテキトーに俺をフってくれたんだ。願ったり叶ったりだ。
「ーーーそれに」
が。
涼月は俺の気持ちを裏切るように話しを続けた。
「あなたは確かにいい人だと思うわ。けれど、それはクラスメイトとしてだと思うの。はっきり言うとあなたはいい人どまりなの」
「！？」
なんだか、男として非常に言われたくないことを言われたような・・・・。
涼月さん？　もう、いいですよ？　あなたはちゃんと俺をフったん

ですから。
「ああ、ごめんなさい。あなたはとってもいい人なのに、どうして断らなくちゃいけないんだろう。
本当にいい人なのに」
ザクッ。
「だから、ごめんなさい。でも坂町くん。最後に一つだけ言わせて。いつまでもいい人で終わっちゃだめよ。困ったときは相談して、私はいつでもあなたを応援してるわ。大丈夫ーーーーあなたは、いい人だもの」
・・・・・・・。
あれ？ちょっと目にゴミが・・・・・・。
気付けば俺は、逆転さよなら負けした高校球児のようにがっくりと床に座り込んでいた。
「あの・・・よかったらこれで何かおいしいものでも食べてください」などなど。
そんなやけに優しい気遣いの応援メッセージを俺にかけ「そっとしておいてあげよう」と去って行くＳ４と見守る会のメンバー達。
いつしか旧体育館に残っているのは、俺と涼月だけになっていた。
「どうしたの？　ジローくん。そんなに落ち込んだりして。多分だけど、こうなることはあなたの計画だったんじゃない？」
いつもの平然とした調子で話しかけてくる涼月。
いや、そりゃそうだけど・・・・。
「だったら感謝してほしいわ。わざわざ同情を買うようにひどいフリ方をしたのに」
くたばれこの悪魔めえええええええ！！！
「ふふ、そんなに怖い目をしないで。いいじゃない、助かったんだから」
「まぁ、それもそうだけどさ」
よいしょと力を入れて立ち上がる。
「でもジローくん。」

涼月は、立ち上がった俺に訊ねてきた。
「さっきの告白。もし私が了承していたら？」
「は？」
「だから告白よ。もし私があなたの告白をＯＫをだしていたら？」
えーっと・・・・・。
「そしたら、ごめん嘘だったって謝ってたと思う」
「・・・・・」
涼月は「ふぅん」と呟くと、口唇の端を吊り上げ悪魔のように笑った。
・・・・怖いよっ！？
涼月さん！？　いろいろと仮面が剥がれてますが！？
「ねぇジローくん。」
急に。
涼月は、えさをねだる子猫のような声で。
「実は私。結構怒ってるのよ？」
「へ？」
「だって、命を守るためとはいえあんなに大勢の前で嘘の告白するなんて、男として最低よ」
「いや、それは・・・」
確かに、それは言い訳できないけどさ・・・・・
「なので、今から復讐します」

瞬間。
俺が思わぬ報復宣言について考える間もなく。
何を思ったのか涼月は、満面の笑みを浮かべて俺の身体に抱きついてきた。
そして――――いれたてのホットココアのようにとろける甘い声で一言。
「だーぁいすきっ」

それは俺を落とすのには充分すぎるほどのことだった。
鼻血がっ・・・・・・・！？
俺が鼻血をだしているにも関わらず涼月はなおも続ける。
「あなたがぁ。ほんとうにすきっていってくれるならぁ――――」
涼月は妖しく微笑み。
「つきあってあげてもいいわよ」
俺はあまりにことに頭が真っ白だ。口をパクパクとさせ固まっていることしかできない。
そこで涼月は。
「何本気になってるの？　冗談よ」
あ、何？　冗談？なーんだ冗談か。
しかし涼月奏、なんという女。
危うく落とされるところだったぜ。
と、そこまで考えていた俺の頭に強烈な電撃が走る。
なぜならば。
――――――涼月が。
――――――あの涼月が。
俺にキスをしてきたからだ。
さらに固まる俺。頭は壊れた洗濯機よろしくぐるぐると空回りっぱなしだ。
そして――――。
涼月は上目遣いに俺を見つめ。
「これは――――冗談なんかじゃないから」
・・・・・・え？　え？　えええええええええっ！？
そう言って、可愛らしくウィンクをして去って行く涼月を。
俺はやっぱり固まって見送るしかなかった。

スバル様カルトクイズ大会　下（後書き）

次回は駆け落ち編の予定です。
しばらくは夏休みの宿題により投稿できないと思いますがよろしくお願いします

駆け落ちっ！

重い瞼を開け、俺　坂町近次郎は目を覚ました。
身体を起こそうとしたが、頭がボーッとしていたり身体がだるかったりと、起こすのに時間がかかってしまった。
寝起きの目を必死に凝らして周囲を観察する。
この部屋は和式の造りをしているようで、江戸時代に将軍の部屋に飾ってあるような掛け軸や壺が部屋の隅に置いてある。しかも無駄に広い。多分、うちのリビングの三倍はあるな。
「・・・・・んぅ」
と、そんなことを考えていた俺の耳に入って来たのは、女の子の甘い吐息だった。
ハッとして瞬時に部屋の隅に移動する。
そこで見えたのは・・・・・・・・
ドスドスドス。
「おいコラ。起きろデビル」
そう、俺の隣で眠っていたのはなんとあのデビル涼月だったのだ。
ゆっくりと涼月が瞳を開く。
俺はそれを見下ろしながら。
「説明してもらおうか」
「？・・・何を」
「何で・・・・・何で俺がこんなとこにいるかについてだあああっ！」
「何でよ？」
涼月は不思議そうに首をかしげた。
何で？　そんなの決まっている。
俺はバッと窓を指差した。
「どうして俺は海なんかに来てるんだよ！？」
「あら、覚えてないの？」

「覚えてるよ！　ついさっきまで家でアイス食ってたことをな！」
「ついさっきって」
涼月は身体を起こし、近くにあったテレビのリモコンを取ってテレビをつける。
そこには。
「今日は八月六日だけど？」
瞬間。
俺は自分の目と耳を疑った。
何でって？　だって――――。
俺の記憶に八月五日がないんですけど！？
「てめえ！　どういうことかさっさと白状しろ！！」
「仕方ないわね。正直に言いましょう」
俺は話を聴くため、その場に腰を下ろす。
すると涼月の話が始まった。
「夏休みに入って、もう十五日も経ったわ」
「そうだな」
「なのに・・・・面白いことがまったくないじゃない？　そんなの私は耐えられないわ」
「まぁ、いつもの事だな」
「と、いうわけで。あなたに一服盛ってここに無理矢理連れて来ました」
「はい、そこストップ。」
「？」
「？じゃねえよ！！　どういうわけで俺に一服盛る発想に行き着くんだ！？」
「でも、薬が効き過ぎちゃって・・・・丸一日」
「危ねえ！？　一歩間違ったら俺は今頃生きてねえぞ！」
「・・・・・それもそれで面白いわね」
「やめて！　お前が言うと冗談に聞こえない！！」
「安心して。三割冗談よ。」

「半分以上本気だっ！？」
この女マジでシャレにならん。俺の平穏な夏休みはどこへやら。
「はあー。で、これからどうしたいんだよ？」
「駆け落ち」
「はあ？」
あまりに予想外の言葉に頭がついていかない。
「だから、駆け落ち」
「・・・・・・・・・」
え？　何？　駆け落ち？　それって愛し合ってる男女がするもんでしょ？
俺はこんなデビルを愛した覚えはないぞ。
「というわけで、よろしく。あ・な・た？」
苦悩に頭を抱える俺にとびきりの笑顔を浮かべ一言。
ほんと、どうなるんだろうね。
「

チキン　海に行く

ザザーン。
透き通った水が押し寄せては引いていく。
俺はそれをぼんやりと眺めながら。
「おい涼月」
俺が呼びかけると、隣でビーチパラソルをたてていた涼月がこちらを向く。
「何かしら？」
ここは海。
よって、涼月はもちろん水着である。着ているのは大胆な露出の多い黒ビキニ。しかも、涼月はスタイルが抜群にいい。当然、そういうのに耐性がない俺は直視することは愚か、一瞬の油断で出血多量によりあの世いきである。
「何で、海にきたんだよ？」
「それはね、あなたの女性恐怖症を治すための合宿」
「は？」
困惑して固まっている俺などおかまいなしに涼月は、日焼け止めクリームを差し出した。
「というわけで、これ。塗っていただけるかしら？」

♀×♂

「ふぁ・・・・・・っ！」
「・・・・・・・・・」
「んっ！　ああっ！　だ、だめ！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「ゆ、指なのに、こんな・・・・・！？」
「変な声だすんじゃねえよ！　ただ日焼け止め塗ってるだけだろ！？」
「あら、せっかくのサービスなのに・・・・」
「そんなサービスを頼んだ覚えはねえっ！」
ただでさえ俺は恐怖症の発作で鼻血が出そうだってのに。
「・・・・・つまんないわねえ」
と、上半身裸で寝転ぶ涼月が少しだけ身体を起こした。
するとああいう部分がチラチラ見えてしまうわけで。
「うわあああああっ！？　バカ！　涼月！　こ、こっち向くな！」
涼月は、慌てる俺を煽るように顔を少しだけこちらに向けた。
「ついでに・・・・前も塗ってみる？」
「や、やめろって・・・・っ！」
目をつむって顔を背けていた俺の腕が涼月に掴まれる。
す、涼・・・・月、さん？
涼月は俺の腕をそのまま誘導していき、
「涼、月？　お、お前・・・・・何するつもり――――――」
誘導、していき――――――。

お嬢様とチキンと日焼け止め（前書き）

今回はエロです

お嬢様とチキンと日焼け止め

ふよっ。
「あっ・・」
ひっ!? 手にとても柔らかい感触が・・・・・・!?
「涼、月? じょ、冗談はよせって」
「・・・んっ! じ、ジローくん!? そう言うあなたこそこの手は、あんっ!?」
こ、これは手が勝手に・・・。
いや、マジで。
むにゅむにゅ。
「ふぁ・・・・んっ!」
ダメだ。
柔けー。手がとまんない。手に吸い付くような弾力にはみでるようなボリューム。
って!? 何を冷静に揉んでんだ俺は!?
慌てて涼月の胸から手を引く俺。
対する涼月は顔を真っ赤にして胸の前でバッテンを作りうつむいていた。
「ご・・・・・ゴメン」
「じょ、冗談だったのに・・・・・」
俺はたまらなくなって顔を背けた。
か、可愛ええ・・・・・。
やべ、なんかもう一服盛られたこととかどうでもよくなってきた。
え? 何故って? フッ・・・・・男の子なら、分かってくれるだろう?

♀

×♂

その日の夜。
あれから、涼月は口をきいてくれない。
部屋に戻ってもずっと気まずいままだ。
「な、なぁ涼月」
涼月はプイとそっぽをむいてしまう。
「悪かったって・・・・・・あれは、その・・・・・・・・・」
「・・・・・・もういい」
「へ？」
涼月がギロリと俺を睨む。
「もうヤケくそよ。そっちがそうくるならとことんやってやるわ」
「あ、あの・・・・・涼月様？」
「・・・・・・混浴」
「は？」
「私たち、ここでは夫婦ってことになってるの」
「涼月・・・・・・正気か！？」
「当然、一緒に入っていただけるわよね？　あなた」
ひいっ！？　目が据わってる！　本気だよこの女！？
涼月は、着ていた浴衣に前を少しはだけさせると俺の腕に抱きついた。
そして艶かしい口調で。
「私。初めてなの。だから・・・・・・優しくしてね？」
ぎゃあああああああああっ！？　無理無理無理無理無理っ！鼻血がっ！？
鼻を抑えて呻く俺を涼月は楽しそうに見ている。
よし、ここはいっちょう言っとくか。
はい、せーの。
「女の子って、怖えええええええええ！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7958v/

迷える主とチキンな俺と

2011年10月9日15時03分発行